

＊ ＊ 私たちの住む金田村の記憶 ＊ ＊

(2022. 6)

個人の生活 (その6)

<寺田縄 Na、Ni さん>

日枝神社

山王社との名称を、明治になって日枝神社と改称した。

ご神体は「風土記稿」に「木像 五寸」と記されているが、「石」だと思う。

見た人はいないが、霊験あらたかのもので、見るものではない。

神主さんは、伊勢原の大神宮から、平塚八幡宮に変更になった。いろいろな経緯があったようだ。八幡宮が担当するようになって、鯛などの生ものが供物として奉げられたのには、戸惑ったが、さまざまなしきたりがあるものと感じた。

神 輿

米が取れない不景気な時には、神輿を出すことを自粛した。若い衆は、毎年担ぎたくて、お宮の寄り合いなどで「神輿は担ぐためにある」など、強い意見を主張し、意見が通り、経費は若者の工面ということで担ぎ出したこともあった。

神輿の世話役は、当時の地主が担った。

当時の青年会は、消防、水防等多方面を担当し、活躍し、村の原動力となり地域活動の主役だった。神輿の主要なかつぎ手だった。

昭和10年代

寺田縄の農家の大半は水呑み百姓で実に貧乏だった。80町歩もの大地主を筆頭として、6・7軒の地主、残りは皆小作人だった。当時の米の収量は、一等地だと反当り6俵見当、そのうち小作料として地主に3俵を納めた。(二、三等地それより減ぜられた)肥料分が1俵、残りの2俵分での生活だった。

畑作の収量も、米換算で納めた。当然、生活に困窮し借金は増えた。小作人の大半は、複利計算ができずに、地主に儲けられてしまった。時には、小作人・貧乏人は小作料を5升とか3升とかまけてもらう為に、地主にお膝をして懇願した。

家事の燃料はわらを使い、風呂は3・4日に一度だけ、働き者のおばあさんは、孫を背負い、かまどにわらをくべ、膝で団子作り、休む間もなく働いた。

農業以外に働く産業もなく戦時中は軍需産業に働きに出て収入を得た。

苦しい生活の思い出がいっぱいある。

高橋村太郎村長の時代(15～18代・T15～S17)寺田縄の経済が一変した。それは、水田の暗渠排水化により乾田となり、牛馬が投入でき、二毛作が可能となり、稲の単作地帯を脱することができたからである。

村長の家では、暗渠排水導入前、自分の農地に竹を利用した「竹暗渠」で麦を栽培していた。その実績をもって金田地区に暗渠排水が拡大された。

暗渠排水導入の経費は、県からの補助もあり、地元では、地主も負担し小作人は借金や日当で稼いだりして工面した。これは日中戦争への食糧増産という国策に拠ってはいたが、金田の村政及び農家の家政を潤す画期的な事業だった。しかし、経済的に改善されても農業が重労働であったことには変わりなかった。

村太郎村長の業績は優れ、村政に活力をもたらした。

村を作り上げるとか発展途上のときの組長さんは、実業家であることが大切だ。自ら先頭に立ち行政手腕を発揮することが必要で、その後は、文官でもよい。

何事も、作り上げる時には硬派としての活動が待たれるが、平穏無事の時には硬派は不要だ。

先頭に立つ人だけでなく、村民も、再建の為に「むしろ旗」を掲げて反対することなく、皆が村政遂行のために協力したし、その気概が強かった。

役場の吏員も民間企業に働いていた人たちをスカウトし、本人では埒が明かないときには、親父を説得して、役場に集めたこともあった。また、戦後は、戦地から頭脳が帰り、農業を営みながら、地域活動や役人として活躍した。

寺田縄で、水路の改修などの時には、地主の土地を通らねばならず、許可を貰わねば水路は引けない。地主に膝詰め談判をして目的を遂げたこともある。

村会議員はただ働き、その上、村の名士となれば包まなければならない、怠ればけん坊と非難される。損得勘定では報われないが、でも、村づくりという強い意志に支えられていたし、村を発展させようという村民の意識も高かった。

村会といえども議場があるわけでもなく、個人の家や木間さんの別棟で会議を行った。

皇族の行幸等

昭和30年第十回国民体育大会（神奈川大会）の時、金田健民館、金田村のバレーボールを視察に天皇、皇后の来村を受けた

農機具使用の全国大会時 皇太子の来村を受けた

新嘗祭（陰暦11月中の卯の日、現在は11月3日）の献穀米を、高橋勇さんが耕作した。

吉川村長の娘さんは学習院のピアノの先生（公民館入り口に記念碑）だった。

昭和13年の水害・洪水

金目川が切れ、水は東に流れ、別北の満願寺付近に至り、鈴川の右岸も切れ寺田縄に流れ込んだ。寺田縄の東では、深さは障子の三段目位まで、中には、たらいで遊ぶ子供もいた。当時の金田には、排水路がなく四日間ぐらい水につかり、噂話では、長瀬の小川医院付近の土手を切り鈴川に流した。そのためか、水の引きが良かった。

以来、土台を高くし洪水に備える家が増えた。

寺田縄の北部は遊水池的なところであり、水がつきやすい。東橋付近の排水路は、水が出易く、溢水もする。時には、日枝神社に避難することもあった。流れを暗渠にして、1m管を埋設してあるが、その太さは鈴川まで延長されておらず、下流部が狭くなっている。大雨のときの排水能力が低く、心配だ。

農作業

金田の水田は、金目ほどではないが「どぶ田」もあり、「泥舟」（田舟？）という田植えの稲をのせて引く農具を使った。最近まで家に残っていたが、処分した。

子供も作業を手伝ったが、田の中に素足で入り、足をとられ、鋤跡に足を踏み込み飛び上るほど痛かった。

田の草取りは指先の皮がむけ痛みがはしる。指先にカバーをしても直ぐにとれて効果がない。母から作業を強いられたが、とても辛いことだった。

医者には「よく、破傷風にならないな」といわれた。

農家は、忍耐力がなければ勤まらない。

寺田縄は米が主産業、いかに米の増収を計るかが大事だった。

農業用水

富士見橋ポンプ場設置

入野の水田に給水することを目的に設置（村太郎村長時代）された。入野・寺田縄の農家から「寺田縄で捨てた水を使う。上流に水を上げれば洪水の心配が募る」等、苦言が出されたが、落ち水の再利用であり、農業用水は、力のある者が我田引水的に左右される事なく、「足りなければ貰い、余ればあげる」。お互いに助け合い、融通し合うことが原則だ。

榎田（えのきだ）ポンプ場

飯島の堰からの水は、入野、長持、岡崎に落とされ、寺田縄には来ない。寺田縄への給水の為、平塚市との交渉も埒開かず、水のない寺田縄の死活問題なのでポンプ場業者に弁付の200ミリ管を設置させた。弁は開閉・調節が可能だ。

農家にとって、落ち水をいかに利用するかが大切である。

吉祥院と東善寺

吉祥院の号は、県からの補助もあり、東善寺が関東地震で倒壊し、吉祥院と合併後、山王山・吉祥院との銘がつけられた。東善寺の跡地に碑を設けた。

人生論

子供に任せ見ていれば良い、言うなれば仙人のような生き方。また、世間に惑わされずコツコツと好きなことをやって生きること。

何かをやる時には自論を持たなければ、どこにいても通用しない。世を渡るのに大切なことだ。

「寺田縄には悪い人はいないし、水害がなく燃し木があれば、こんな良い土地はない」と言われていた。

< 以上 >